

フィリピン・パラワン島南部海域における 動物観に関する人類学的研究

— 災害の観点から —

辻 貴志*

キーワード

動物観、災害、海域、メガファウナ、フィリピン

目次

- | | |
|--|---|
| <p>I はじめに——災害と動物</p> <p>II 海の動物と災害に関する先行研究</p> <p> 1 動物が災害を引き起こすという観念</p> <p> 2 動物が災害から人間を守るという観念</p> <p>III 調査の概要</p> | <p>IV 調査結果</p> <p> 1 人間の守護神としてのサメに関する観念</p> <p> 2 人間の病気を治癒するワニに関する観念</p> <p>V 海のメガファウナに対する観念とその社会文化的機能</p> <p>VI 結論</p> |
|--|---|

I はじめに——災害と動物

災害は人類にとって大きな課題である。人類は、自然災害や人為的災害に直面してきた。また、未来の予測できない災害リスクから逃れることは不可能である。たとえ災害を予測できたとしても、早急に避難したり十分な対応をとったりすることは極めて難しい。火山噴火、地震、津波、高潮、早魃、台風、洪水、豪雨といった自然災害は、社会に甚大な被害をもたらすことが多い。近年、地球温暖化の影響により、海面上昇で沈む島々や、エルニーニョ及びラニーニャ現象に伴う農業の不振、赤潮の発生による漁業への打撃、家畜の伝染病、高温による熱中症、そして感染症の蔓延によるパンデミック等が、人類の日常生活だけでなく、生存基盤を大きく脅かしている。また、これらの災害に伴い、交通網の麻痺、物価の上昇、都市のロックダウン、紛争、原子力事故、そしてデマの流布のような人為的災害が被害を極度に増大させる。自然災害と人為的災害は切り離すことができず、同時に対策をとる

必要がある。災害は人類にとって過去、現在、未来において世界中のどこにおいても避けることができない災厄である。

一方で、インフラの増強による防災や減災、災害の記憶を通して、人類は何度も災害を乗り越えてきた。人類は災害から学ぶことができ、回復力も備えている。更に、人類は災害の要因を科学的に解明しようと試みてきた。

一般的な科学は、災害の解消や解決を図ることを目的としてきた。そして、俗信を排除することが「科学的」であると広く認識されてきた傾向がある。しかし、俗信の中には一定の根拠や整合性があるものがあり、それらは民族科学の領域を占める（レヴィ=ストロース 1976）。民族科学は、西洋的思考により未開のレッテルを張られてきた。しかし、人類は在来民族科学によって、災害を解釈し、社会の安寧を図ってきた面もあることに注意が必要である。

本稿では、災害（自然災害及び人為的災害）に対する人類の観念について民族科学を念頭に置き、人類学

* アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）

の視座から検討する。特に、災害を引き起こすと考えられている海の動物に焦点を当てた考察を行う。人類はしばしば災害の原因を動物の仕業と解釈し、それを鎮めることを災害解決の方法であると理由付けしてきた。このような災害の「動物化」は世界中の広い範囲で確認できる。すなわち、人類は基本的にどこでも同じように物事を解釈する普遍特性を持つ（ブラウン 2002）。

ただし、人類は単に動物を災害の原因として否定的に解釈してきたわけではない。むしろ、災害を超えて動物が人類に益をもたらす側面についても創造してきた。災害を引き起こすとされる動物は、翻って人類の命を救う存在となる。このことは、災いを益に好転させようとする人類の創造性の豊かさを象徴する。

世界の中でも特にアジア太平洋地域の海域では、危機に瀕している人間を海の動物が救うという観念が広く確認できる。このような観念は、一神教以前の人類の普遍特性や人間性に基づく自然崇拜と捉えることができる。本稿では、フィリピンの海域のパラワン島南部における先住民とムスリムを対象に、人間に危害（災害）を及ぼすと一般的に考えられている海のメガファウナ（大型野生動物）の中でも特に危険視されているサメとワニに焦点を当て、これらの動物が人間の命を救うという観念について報告する。そして、このような観念が当該の地域社会において、どのような文化的な役割や機能を持つのか検討することを目的とする。

本稿は、筆者のこれまでの関連論文（辻 2012, 2022, 2023; Tsuji 2021, 2022）の内容に基づく箇所があるが、新たな知見を加えて大幅に発展させたものである。また、本稿の主なデータは15年程前に得たが、将来的に生じうる災害について対処していくためにここで敢えて取り上げることは重要であると考え。災害は過去からしか学べない点が多いことも、本稿でやや古い過去のデータを典拠に再考する理由である。更に、フィリピン地域研究の分野では災害に関する厚い研究（Bankoff 2002; Warren 2024）はあるものの、災害と動物との関係には言及されていない。よって、本稿において、災害を動物というレンズを通して新たに捉え直すことを期する。

II 海の動物と災害に関する先行研究

1 動物が災害を引き起こすという観念

世界では、動物が災害を引き起こすという観念が広

く分布する。例えば、地震の原因は、ウシ、ヘビ、魚、そして巨人であることが少なくとも確認できる（大林 1979）。フィジーでは、地震やその他の災害は、水の世界を統治するカミの化身である魚が引き起こすとされる（後藤 1999）。ポリネシアでは、人々に飲み水を提供する泉に生息するウナギを食べると、泉が干上がると考えられている（高山 2009）。オーストラリアのアボリジニの間では、蛇行する川の地下に潜ったヘビが洪水を引き起こすと信じられている（ポイニャント 1993）。琉球列島の石垣島では、網に掛かったジュゴン救出した人々に、ジュゴンが「これから巨大な津波がこの村を襲うでしょう」という言い回しをした。その出来事を信じなかった人々は津波に飲み込まれて死んでしまったという。この伝承は、1771年に実際に起きた明和の大津波に関するものである（上勢頭 1976）。関連して、日本各地には、巨大ナマズが地震を引き起こすという観念が広く分布する。江戸時代に大量に出回った「鯰絵」は、安政2年（1855年）の江戸大地震の際の日本人の地震への対応についてユーモアを持って描いた風刺画である（アウエハント 2013）。また、日本人は、リュウグウノツカイを始め、深海魚が海岸に打ち上げられると災害の予兆と捉えてきた（保科 2015; Orihara et al. 2019）。

2 動物が災害から人間を守るという観念

一方で、海の動物が人間の命を救うという観念も広く確認できる。アジア太平洋地域では、魚が海で溺れている人間の祖先を救ったという口承伝承が多い（矢野 1979; 後藤 1999; Ivanoff 2001）。ミクロネシアでは、カヌーが転覆した際に、女神の化身であるエイが人々を救出したことから、人々はエイを捕えたり、食べたりしてはいけない（高山 2009）。ポリネシアでは、バショウカジキが航海者を波から守ったり、サメが漂流者や転覆したカヌーを陸地に引っ張ったりする物語が残る（トンプソン 2022）。ベトナムの漁民は、クジラが大津波のような壊滅的な災害を引き起こす一方、海での苦難から航海者の命を救うカミであると信じている（Anh 2022; Anh and Toan 2024）。世界各地の水域で、大型に成長するワニは人間を死に至らしめる危害を加えることがある。一方で、その人智の及ばない攻撃力や生命力を霊的とみなし、翻って人間を守護すると考える観念が存在する。実際に、マレー世界では、ワニを人間の守護神とみなす（後藤 1999）。

琉球列島では、サメが海で溺れている祖先を救助し

たという伝承が残る（矢野 1979）。筆者による調査でも、八重山郡の特定の家系の人々は、サメが海で溺れていた祖先を救助したことから、サメ肉を食べないことが判明した。サメ肉を食べると、腸捻転の症状が起きると信じられている。サメは、海神またはその使者と考えられている（中村 2024）。

本稿で報告するように、フィリピン・パラワン島南部海域でも先住民やムスリムの間で、人間に危害を加えることがあるサメやワニが人間の命を救うという同様の観念が確認できる。人命を救助するサメやワニに関する観念は、東南アジアやオセアニアで広く信じられている（Tsuji 2021）。

生態環境の違いに応じて登場する動物は異なるものの、以上のように、アジア太平洋地域で災害に直面した人々は、災害の原因を特定の動物の責任にする一方、動物を災害から人間の命を救う存在として捉えてきた。

III 調査の概要

本稿に関する調査は、フィリピン南西部のパラワン州に位置するパラワン島南部バタラサ郡の一村落で行った。バタラサ郡は、パラワン州の州都であるプエルト・プリンセサから車で六時間ほど南に下った地点に位置する。先住民に加え、ムスリムの人口が歴史的に多い土地柄であるが、現在はキリスト教徒が趨勢を占める。農漁業が人々の主な生業である。在来の焼畑農耕に加え、ココナツやバナナのプランテーションも多く確認できる。また、ニッケル、コバルト、マンガンの採掘も盛んであり、鉱山開発が地域の経済と生活の発展を牽引している。一方で、移民や開発の流入は、地域における社会・生態環境災害を引き起こしている。この社会・生態環境災害の詳細については第V章で触れる。

調査期間は、主に2009年9月6日～11日、そして2010年10月26日～11月4日であった。

調査対象には、土地の先住民と非先住民のムスリムを選んだ。先住民はパラワン、モルボッグ、パニムサン、ジャマ・マブンは、パラワン島南部を代表する先住民であり、アニミズムを信仰する。モルボッグは、パラワン州南部のバラバック島を起源とする先住民であり、イスラームを信仰する。パニムサン（ムスリム化したパラワンであり、カラワとも呼ばれる）は、パラワン島南部ブルックス・ポイント郡

を出自とする先住民である。モルボッグとパニムサンは、言語文化的にパラワンに近い民族である。ジャマ・マブンは、フィリピン南部のカガヤン・デ・タウィタウィ島を起源とする先住民であり、ムスリムである。タオスグは、フィリピン南部のホロ島を出自とするムスリムである。タオスグとジャマ・マブンは、パラワン島の歴史においてパラワン、モルボッグ、パニムサンといった下位の先住民を支配した階層であり、今日でもこれらの先住民を見下す傾向がある。

調査方法は、聞き取りを採用した。調査言語には、国及び島の公用語であるタガログ語を用いた。調査は、カウンターパートであるフィリピン大学ディリマン校国際学研究所の監督下で実施した。

IV 調査結果

1 人間の守護神としてのサメに関する観念

パラワン島南部では、一般的にサメは獐猛なメガファウナであると考えられている。しかし、少なくとも五グループの民族集団が、サメによる危害を超えて、サメに対して人命を救助する、あるいは自分達の祖先とみなす観念を有している。いずれの民族集団も、サメが海で溺れている祖先を救助したと信じており、サメ肉を食べることを禁忌とする。

バラバック島のモルボッグはアカシュモクザメ、バタラサ郡のモルボッグはトンガリサカタザメについて、人命を救助する存在とみなしている。人々は、アカシュモクザメ及びトンガリサカタザメを食べることを禁忌とする。調査地の人々によると、これらのサメを食べると体に痛みが生じ、肌に鱗状の瘡蓋が現れる。また、リューマチの人はこれらのサメを食べてはいけないという。モルボッグの中には、トラフザメを食禁忌の対象とする人々もいる。

パラワンは、トラフザメを人命救助するサメとみなし、食禁忌の対象とする。人々はこのサメは自分達のキョーダイのような存在だと言う。もしこのサメを食べると、命を落とすという。中には、トンガリサカタザメやサカタザメを食禁忌と捉える人々もいる。

パニムサンは、トラフザメを人命救助するサメとみなし、食禁忌の対象とする。人々はこのサメを獐猛であると考えている。彼らの中には、サカタザメについて、人命救助をするサメと捉える人々もいる。このサメを食べると体中が痒くなるという。

ジャマ・マブンは、タオスグは、サカタザメについて

人命を救助するサメとみなし、食禁忌の対象とする。彼らはこのサメを自分達のキョーダイのような存在であると信じる。また、サメのような鋭い歯を持つオニカマスを人命救助する魚とみなす。なぜなら、この魚が海で溺れている自分達の祖先を救助したからだという。そして、オニカマスを食禁忌の対象とする。たとえば、この魚を釣っても海に戻すという。

上述のように、人命救助をするサメの種類には同じ民族間でも揺れがあり、このことは調査地域における頻繁な通婚(辻 2020)やそれに伴う文化の均質化の影響である可能性が考えられる。

以上、パラワン島南部の主要民族集団の間に伝わる人命を救助するサメの観念について報告した。結果、どの民族集団も、人命を救助するサメ(エイを含む)の存在を独自に認めていることが判明した。なお、この観念は調査地のキリスト教徒の人々の間では確認できなかった。パラワン島南部を出自とする民族集団だけでなく、フィリピン南部の島々を出自とする民族集団の間でもこの観念が確認できることが明らかとなった。すなわち、人命を救助するサメの観念は、フィリピン南部の文化要素の影響が強いと考えられる。タオスグやジャマ・マブンといったフィリピン南部出身の伝統的支配層のムスリムと、被支配層であるモルボッグ、パラワン、パニムサンといったパラワン島南部の先住民は、人命を救助するサメを祖先とする共通の観念を有する。以上の各民族集団を分ける一つのメルクマールは、集団毎に種類が異なる人命を救助するサメの存在である。つまり、この地域では、ある人々を共通の祖先を持つ氏族(クラン)として分類する際に、サメという表象が用いられる。サメの種類が異なれば、別の氏族であるというわけである。

今日、人命を救助するサメの観念はトーテミスティックな分類体系を有するものの、人々が崇拜するカミや神とほとんど結び付いていない¹。しかし、遠い過去にはサメが集団内の結束を高めたり、集団間のコミュニケーションを円滑にしたり、あるいは民族間の階層序列や統治に機能していた可能性が考えられる。これらのことについて調査地の人々は全く意識していなかったが、少なくともパラワン島南部の先住民やムスリムは、それぞれが祖先として崇める種類のサメに

人命を救助する存在として文化的意義を見出したことは確かであろう。

2 人間の病気を治癒するワニに関する観念

一般的に、ワニは人間を襲い、死に至らしめる獰猛な性質を持つ沿岸域のメガファウナである。フィリピン各地ではワニによる人身被害が起きているが、本稿の対象地域であるパラワン島でもワニ(イリエワニ)による人身被害が度々起こる。ワニは汽水域で水浴び中及び漁撈中の人々を襲う。特に、漁撈に従事する男性の被害者が多く、死亡に至るケースも少なくない。

フィリピン人の多くは、ワニを毛嫌いの傾向がある。なぜなら、ワニが家畜や人間を残忍に殺すネガティブなイメージを付与された動物だからである。舟を利用する人々はサメよりも、むしろ舟をひっくり返すワニを恐れる。

ワニはフィリピンで広くブワヤと呼ばれるが、欺瞞的で強欲な人物のことをブワヤと表現する。フィリピン人は、腐敗した政府の役人や政治家や警察官についてもしばしばブワヤと蔑む。スペインの植民地統治期、スペイン人はワニを悪と危険の象徴とみなし、19世紀までのフィリピンでの布教活動によって、一般的に貪欲とエゴイズムと関連付けた(van der Ploeg 2013; van der Ploeg et al. 2011)。

しかし、パラワンは、自分達の祖先がワニであると語る。そして、ワニを「祖先」あるいは「祖父」と呼ぶ。沿岸に仕掛けられた定置網にワニが掛かっても、決して殺さず、意図的に逃す。パラワンは、ワニを食禁忌の対象とみなしており、捕えたり食べたりすることはない。ワニを食べると、人間の肌がワニの皮膚のような状態になると考えられている。一方で、ワニの攻撃性に恐怖心を感じている人々も少なくない。その理由として、彼らは、人間が過去にワニと交わした約束を反故にし、両者の関係が崩れたからだと認識している。例えば、パラワン島南部では、1940～1950年代にかけてワニ皮を商業的に取引するためのワニ狩りが激しく行われた。

パラワンのワニに関する民話の中には、ワニと人間の本来あるべき共存関係を表したものが確認できる。特に、人命を救助するワニの民話が二つ語り継がれて

¹ レヴィ=ストロースは、トーテミズムについて、「いくつかの社会集団においては、人と動植物あるいは自然の事物との間に内密的な関係を指定しようとするごく一般的な性向が、親族ないしはそのように規定されたものの集まりに具体的な名を与えるのに貢献」しているが、「いわゆるトーテミズムはつねになんらかの形の外婚制を前提」とすると主張した(レヴィ=ストロース 1970)。

いる。その一つの筋書きは、次の通りである。病気を抱えた祖先が、夢に現れたお告げを基に川に行き、そこで巨大なワニと出会った。そして、祖先は、自殺しようとしてワニの口の中に飛び込んだ。しかし、ワニは祖先をワニの集落に連れて行き、薬を与え病気を治癒した。その見返りとして、ワニは自分達を殺さないよう祖先に約束させた。それ以来、パラワンはワニを殺さなくなった。

もう一つの民話の筋書きは、次の通りである。病気の子供を抱えた母親が、夢に現れたお告げに従い川に行き、そこで巨大なワニと出会った。彼女はお告げの通り、ワニの背中に子供を乗せて水浴びさせた。そうすると、ワニは、人間とワニは共存関係にあり、決して殺し合ってはいけないと言った。それ以来、その子供は一切病気をしなくなった。パラワンの社会の中で病気をしない壮健な老人は、ワニに感謝の念を抱いていると考えられている。よって、パラワンは、民話の世界の契約に基づいて、決してワニを殺すことはしない。また、彼らによると、ワニもまた人間を襲うことはない。

以上のように、パラワンは、人間に度々危害を与え、時には失命させるワニに対して人命を救助する動物という逆説的な観念を付与していることが彼らの民話の分析から明らかとなった。

V 海のメガファウナに対する観念とその社会文化的機能

以上のように、海のメガファウナに対する観念は、人々の在来自然観を反映している。海に寄り添い生きる人々は、サメやワニと向き合ってきた。そして、独自の観念をこれらの動物に付与してきた。特に、サメとワニは人間を襲う獰猛な側面を持つ。獰猛な動物による危害は、人間にとって災厄であり災害である。人間はこれらの動物による被害から逃れようと考えてきた。例えば、ヤップ島やパラオ諸島では、人々はサメによる襲撃から逃れるために体に文身を施した（大林 1976; 吉岡 1989）。フィリピンでは、人々の多くは、文身という身体変工に加え（Wilcken 2010）、自分達の物質・芸術文化にワニのデザインをあしらひ、ワニを崇拜してきた（Casiño 1981）。人々はあらゆる機会に文化的な対策を講じて、サメやワニの獰猛な性質を解釈しようとしてきた。サメやワニの観念もまた、このような理由の下で創造されてきたのであろう。すな

わち、これらの動物による被害を理由付けすることで、人々は恐怖の念を最小限に抑えようとしてきた。そして、不安や混乱を避け、コミュニティの維持を図ってきたと考えられる。以上の事例は、人間が想像力を働かすことにより動物がもたらす災害を乗り越えようとしてきたことを如実に示す。しかしながら、このような動物に対する観念は、社会環境の急激な変化により次第に顧みられなくなりつつあり、パラワン島南部では少数の人々の有する俗信として今日にかすかに存在しているのが実情である。ただし、それが何らかの理由で有用であるから残っている可能性も十分に考えられる。なぜなら、未開と言われる文化は、現実が科学的認識の域を超えて、感覚による知覚の域で意味を持ちうるのである（レヴィ=ストロース 1986）。

災害から人間を守るという動物観は、コミュニティの災害に対する意識を高めることに貢献してきた他、社会秩序を維持することに役立ってきたと考えられる。しかし、今日のパラワン島南部の文脈では、このような観念は民族集団のアイデンティティを僅かに表す指標でしかない。

以上で見てきたサメとワニに関する動物観は、過去にパラワン島南部でイスラーム化が進んだローカルヒストリーの中で、消え去ることはなかった。むしろ、先住民の在来の信仰と慣習がイスラームと融合したフォーク・イスラームに発展することで先住民の根本的な信仰システムは保持された（Casiño 1974）。こうした動物観は、階層的なイスラームの教理が浸透する以前の自然社会のトーテミスティックな信仰形態をよく反映している。

動物が災害から人間を守るという観念は、一方で、今日の社会・生態環境災害の中で急速に希薄化しており、パラワン島内での移民や開発の流入に対して極めて無力であると考えられる。ここで、パラワン島における社会・生態環境災害について報告しておきたい。

パラワン島南部の先住民やムスリムは、社会・生態環境災害の危機に直面している。社会・生態環境災害とは、自然災害ではなく、人為による災害である。

パラワン島南部は、15世紀にフィリピン南部に発生したムスリムのスルースルル王朝の支配下に置かれた歴史がある（Warren 1999）。また、マラリアが蔓延する地でもある。ムスリムやマラリアの脅威から、パラワン島は「フィリピン最後の未開拓地」と呼ばれ、外部の人々を長らく寄せ付けなかった。しかし、1950年を境に、島外からより良い生活の機会を求めた大量の

移民が押し寄せた (Eder and Fernandez 1996)。そして、島の豊富な木材や鉱物資源を狙った天然資源開発が激しく行われた。これらの島の社会・生態環境災害は、島の先住民やムスリムの生活に大きく負に影響した。特に、移民と開発の影響は、先住民やムスリムの生活や文化を急激に変容させた。今日、島の人口の大多数をキリスト教徒が占め、伝統的なムスリムのヘゲモニーは周縁に追いやられた。それにつれて、先住民の自然に依存した生活基盤も弱体化した。

島の先住民は、主に焼畑農耕に従事してきた。三月頃の乾季になると、先住民は、豊富な森林を適度に切り拓き、火を入れ、木材を灰とする。そして、その灰を畑の養分として作物を育てる。五月頃の雨季には、天水を利用して作物を育成させる。十一月頃に作物を収穫する。畑地の地力が低下すると、別の場所で同じ作業をする。こうして、最終的に、元の畑地に戻ってくると、地力は回復している。同時に、人々は、焼畑農耕に関連する独自の儀礼を発達させてきた (辻 2005, 2006)。よって、生態系を過度に破壊することなく、先住民は長年に渡り焼畑農耕に依存した生活を維持し続けてきた。

しかし、パラワン島南部では、移民や開発の影響により、先住民の焼畑農耕の伝統的システムは崩壊した。移民は生態系を無視した破壊的な焼畑農耕を行い、その結果、森林は大きく消失した (Eder 1997)。開発もまた、先住民が従来焼畑農耕に利用してきた祖先伝来の土地利用権を奪った。移民や開発は、先住民の土地を囲い込み、私有化した。結果、先住民は焼畑のサイクルを維持できなくなり、同じ畑で火入れを繰り返すようになり、畑の地力は極端に低下した。今日、焼畑農耕では生活に十分なコメを栽培できなくなり、先住民は水田地帯に定着した移民集団が栽培する水田米を購入するジレンマに陥っている。パラバック島のモルボッグは、焼畑農耕が低迷したことから、彼らはキリスト教移民の小作となり、借金をする負債関係 (debt relationship) に陥った。そして、社会経済的に優位である移民の支配を受けるようになった (Blanchetti-Reveli 1996)。パラワンの間では、祖先伝来の土地が移民によって収奪された結果、パラワン独自の文化の剥奪 (deculturation) が生じた (Brown 1996)。島の先住民タグバヌアの間では、移民による生態系に不適切な焼畑農耕、及び鉱山開発の影響により、伝統的な森林利用に困難が生じた。特に、主に森林で採取してきたトウ (ラタン) やマニラ樹脂の資源量が減少し、彼

らはこれらの資源を森林の奥深くまで探索しなければならなくなった (Connelly 1985, 1996)。島の先住民バタックの間では、移民が引き起こした森林減少により、森林資源の探索に時間を多く費やすようになった。結果、摂取カロリーが減少する中、消費カロリーが増加し、身体的なストレスが生じるようになった (Cadeliña 1982)。そして、バタックのコミュニティは疲弊し、民族の絶滅 (tribal extinction) が危惧されている (Eder 1993)。

以上のように、パラワン島の先住民にとって、移民や開発の流入による彼らの社会・生態環境への甚大な被害は災害そのものであった。社会・生態環境災害は、社会・生態環境への被害だけに留まらず、先住民独自の文化、祖先伝来の土地権、人々の健康にも及んでいる。パラワン島では、現在でも移民や開発の流入が続いており、社会・生態環境災害は一時的ではなく恒常的である。特に、今日、キリスト教徒の人口が支配的であり、島の人口増加、政治構造、宗教にも相当な影響を及ぼしている。社会・生態環境災害は、回復できない状態まで人間と生態環境を根本から蝕む点で相当深刻である。

このような中、災害から人間を守る動物に関する観念は、変容の過程にある在来の社会や文化を記憶し、自分達のアイデンティティを表象し、コミュニティの紐帯を維持する宗教的側面や集団間のコミュニケーション機能を内包していると考えられる。そして、重要なことは、辺縁に追いやられた先住民やムスリムが、このような動物観を継承し現在も保持していることである。加えて、これらの動物観は、今日の社会・生態環境災害下に生きる先住民やムスリムの心意を豊かにし、コミュニティの仲間意識を高めることに貢献している可能性が高い。

VI 結論

以上、動物が災害から人間を守る観念について、アジア太平洋地域の事例を踏まえ、特にフィリピンにおける海のメガファウナであるサメとワニについて議論し、その社会文化的な役割や機能の解明を試みた。

サメやワニのような海のメガファウナは、一般的に嚙猛であり、人間に危害を加えることがある。翻って、パラワン島南部ではサメとワニが人間の病気を治癒したり、海中で溺れている祖先を救ったりするという伝承が確認できる。しかも、民族集団の違いに応じて、

崇拜するサメの種類が異なるというトーテミスティックな分類の観念も見られる。これは、人智を超えたサメやワニの力に対して、人間が恐怖を超えて畏敬の念を持つことの表れである。人間はサメやワニの脅威や被害を自らが理解できるよう解釈し、これらの動物を畏怖することで生活に平穏をもたらそうとしてきたことが窺える。

パラワン島南部の辺縁に生きる先住民やムスリムは、現在でもこのような動物観を有していることを本稿では報告したが、こうした動物観は、アニミズム、トーテミズム、そしてフォーク・イスラームが融合した人間と動物を調和させようとする文化的規範であると考えられる。この自然社会の規範は、人間の宗教的な本性や心意による災害の解釈法であり、災害を動物の習性と結び付けて理解することが人間生活に適していることを示唆する。

人間は、地球上の長い人類史の中で、災害と背中合わせで生き抜いてきた。その過程で、人間は動物に神格化したキャラクターを付与することで、災害にカミや神を近付け、神学的に災害を解釈しようとしてきたと言える。すなわち、災害と奇跡は通常感覚では理解しがたい。そこで、人間は災害に動物を介入させることで、宗教的に災害と奇跡は動物が引き起こすと考え、独自の動物観を創り出したのであろう。動物は、災害を引き起こすと同時に、人間を救う奇跡を起こす次元に昇華する。

動物が災害から人間を守る観念は、災害時の被害を人間が納得して受け入れやすいように、獐猛とされる身近な動物を親和的に採用した人々の間で語り継がれてきた。そして、コミュニティの安寧と維持が達成されてきたと考えられる。

また、サメやワニのような動物を人々が忌避すると共に、崇拜するところに人間の心性の両極性を見て取れる。この両極性は、人間性に由来し、創造性に満ちた人間性こそ災害に対処できるという意識を涵養してきたと考えられる。災害を解決するのは結局のところ人間であり、人間性の宗教的側面を駆使して災害を最小化するのも人間の為せる技である。

しかしながら、今日、こうした動物観は希薄化の一途を辿りつつある。社会生活の近代化や一般的な科学知識の普及により、世界的に古い形式の観念は評価されなくなりつつある。ここで「生きている遺産」としての動物観を照射することは、自然と人間の関係を再構築し、より自然の脅威を理解した防災知識や行動の

発展に資するであろうことを付言しておきたい。

動物が災害から人間を守るという観念を探究することは、過去から現代に至る文化、社会、歴史、宗教を始めとするローカルヒストリーの理解に繋がる。ローカルヒストリーの中には、災害の事件性の他、災害の解決のためのヒントが埋め込まれている可能性が十分にある。辺縁の先住民やムスリムの何気ないような在来知識を時代遅れなものとして軽視するのではなく、民族科学として目を向けることで、今日の災害についてヴァナキュラーな科学の視点に基づいた合理的な災害対策が求められるであろう。人間と災害は切り離せない関係にあるが、一般的な科学のみで災害が解決できないことは周知の事実である。本稿で論述してきたパラワン島南部のサメとワニに関する動物観は、災害に対するコミュニティの結束を高める人々の心意の表れであると結論付けられる。

地球規模であらゆる災害のリスクに曝された人類は、災害に打ちひしがれるだけでなく、そのホモ・サピエンスとしての知恵を最大限に駆使して災害に臨機応変に立ち向かえる未来志向的な融通が利く習性を持つ。災害に関する動物観の研究は、災害を動物というキャラクターを通して親しんで理解する社会的に有用な術の構築に寄与するであろう。最後に、動物観は、災害だけでなく、人間性を探究するためにも重要な視座を提供することを指摘し本稿を締め括る。

参考文献

(日本語文献)

アウエハント、コーネリウス

- 2013 『鯨絵——民俗の想像力の世界』小松和彦・中沢新一・飯島吉晴・古家信平（訳）、岩波書店
(Ouweland, Cornelis 1964 *Namazu-e and Their Themes: An Interpretative Approach to Some Aspects of Japanese Folk Religion*. Leiden: E. J. Brill.)。

大林 太良

- 1976 『世界の神話——万物の起源を読む』日本放送出版協会。

- 1979 『神話の話』講談社。

上勢頭 亨

- 1976 『竹富島誌——民話・民俗篇』法政大学出版局。

後藤 明

- 1999 『「物言う魚」たち——鰻・蛇の南島神話』小学館。

高山 純

- 2009 『ミクロネシア人が鰻を禁忌する習俗の起源』六一書房。

辻 貴志

- 2005 「パラワン島南部におけるモルボッグの漁撈活動の展開——焼畑低迷後の市場化とその今日的意義」『エコソフィア』16: 73-86。
- 2006 「フィリピン・パラワン島における先住少数民族の焼畑耕作とその民俗知識・儀礼に関する研究」『人間文化』21: 101-115。
- 2012 「「守護神」としてのサメとワニ——フィリピン・パラワン島の事例」『万葉古代学研究所年報』10: 113-125。
- 2020 「フィリピン・パラワン島南部の焼畑漁撈民モルボッグの婚姻制度に関する予備的研究」『人間文化』46: 17-26。
- 2022 「フィリピン・パラワン島南部におけるサメにかんする民俗」『民俗文化』34: 37-46。
- 2023 「フィリピン・パラワン島南部におけるワニに関する人類学的研究——狩猟の歴史と祖先民話に着目して」『ビオストーリー』39: 97-109。

トンブソン、クリスティーナ

- 2022 『海を生きる民——ポリネシアの謎』小川敏子(訳)、エイアンドエフ(Thompson, Cristina 2019 *Sea People: The Puzzle of Polynesia*. New York: Harper.)。

中村 禎里

- 2024 『日本動物民俗誌』講談社。

ブラウン、ドナルド

- 2002 『ヒューマン・ユニヴァーサルズ——文化相対主義から普遍性の認識へ』鈴木光太郎・中村潔(訳)、新曜社(Brown, Donald 1991 *Human Universals: Reflections on its Whence and Whither*. California: McGraw-Hill.)。

保科 俊

- 2015 「漂着物のイメージに関する研究——リュウグウノツカイを例として」『漂着物学会誌』13: 45-48。

ポインヤント、ロズリン

- 1993 『オセアニア神話』豊田由貴夫(訳)、青土社(Poignant, Roslyn 1985 *Oceanic and Australasian Mythology*. London: Hamlyn.)。

レヴィ=ストロース、クロード

- 1970 『今日のトーテミズム』中澤紀雄(訳)、みすず書房(Lévi-Strauss, Claude 1962 *Le Totémisme Aujourd'hui*. Paris: Presses Universitaires de France.)。
- 1976 『野生の思考』大橋保夫(訳)、みすず書房(Lévi-Strauss, Claude 1962 *La Pensée Sauvage*. Paris: Plon.)。
- 1986 『はるかなる視線1』三保元(訳)、みすず書房(Lévi-Strauss, Claude 1983 *Le Regard Eloigné*. Paris: Plon.)。

矢野 憲一

- 1979 『ものと人間の文化史35 鯨』法政大学出版局。

吉岡 郁夫

- 1989 『身体の文化人類学——身体変工と食人』雄山閣。

(外国語文献)

Anh, Phan

- 2022 The Role of Culture in Disaster Risk Reduction and Climate Change Adaption: Insights from a Fishing Community in Viet Nam, *Practical Studies* 1 (7): 65-80.

Anh, Phan and Toan, Vu

- 2024 Intangible Cultural Heritage in the Context of Disasters and Climate Change: A Case Study of a Fishing Community in Viet Nam. In *Natural Hazards and the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage: Experiences from the Asia-Pacific Region*. International Research Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region (IRCI), pp. 19-36. Sakai City: IRCI.

Bankoff, Greg

- 2002 *Cultures of Disaster: Society and Natural Hazard in the Philippines*. Oxford: Routledge.

Blanchetti-Revelli, Lanfranco

- 1996 Ecology, Rice and Debt among the Molbog. In *Palawan at the Crossroads: Development and the Environment on a Philippine Frontier*. Eder, James and Janet Fernandez (eds.), pp. 111-126. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Brown, Elaine

- 1996 Tribal Displacement, Deculturation and Impoverishment. In *Palawan at the Crossroads: Development and the Environment on a Philippine Frontier*. Eder, James and Fernandez, Janet (eds.), pp. 97-110. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Cadelina, Rowe

- 1982 Batak Interhousehold Food Sharing: A Systemic Analysis of Food Management of Marginal Agriculturalists in the Philippines. PhD. Dissertation, University of Hawaii.

Casiño, Eric

- 1974 Folk Islam in the Life Cycle of the Jama Mapun. In *The Muslim Filipinos*. Peter Going and Robert McAmis (eds.), pp. 165-181. Manila: Solidaridad Publishing House.
- 1981 Arts and Peoples of the Southern Philippines. In *The People and Art of the Philippines*. Gabriel Casal, Trota Jose, Jr., Eric Casiño, George Ellis, and Wilhelm Solheim II, pp. 128-182. California: Museum of Cultural History, University of California, Los Angeles.

Connelly, W. Thomas

- 1985 Copal and Rattan Collecting in the Philippines, *Economic Botany* 39 (1): 39-46.

- 1996 Strategies of Indigenous Resource Use among the Tagbanua. In *Palawan at the Crossroads: Development and the Environment on a Philippine Frontier*. Eder, James and Fernandez, Janet (eds.), pp. 71–84. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Eder, James
 - 1993 *On the Road to Tribal Extinction: Depopulation, Deculturation, and Adaptive Well-being among the Batak of the Philippines*. Quezon City: New Day Publishers.
 - 1997 *Batak Resource Management: Belief, Knowledge and Practice*. Gland: IUCN-The World Conservation Union.
- Eder, James and Janet Fernandez
 - 1996 Palawan, A Last Frontier. In *Palawan at the Crossroads: Development and the Environment on a Philippine Frontier*. Eder, James and Fernandez, Janet (eds.), pp. 1–22. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Ivanoff, Jacques
 - 2001 *Rings of Coral: Moken Folktales*. Bangkok: White Lotus Press.
- Orihara Yoshiaki, Kamogawa Masashi, Noda Yoichi, and Toshiyasu Nagao
 - 2019 Is Japanese Folklore Concerning Deep-sea Fish Appearance a Real Precursor of Earthquakes?, *Bulletin of the Seismological Society of America* (<https://www.sems-tokaiuniv.jp/doc/Orihara2019BSSA.pdf>: 2025年5月25日閲覧).
- Tsuji, Takashi
 - 2021 Crocodiles in Philippine Folklore, *Southeastern Philippines Journal of Research and Development* 26 (1): 19–34.
 - 2022 A Study on Shark Totems among Ethnic Groups in the Southern Palawan Island of the Philippines, *Ignis* 2: 59–74.
- van der Ploeg, Jan
 - 2013 Swallowed by a Cayman: Integrating Cultural Values in Philippine Crocodile Conservation. PhD. Dissertation, Leiden University.
- van der Ploeg, Jan, van Weerd, Merlijn and Gerald Persoon
 - 2011 A Cultural History of Crocodiles in the Philippines: Towards a New Peace Pact?, *Environment and History* 17 (2): 229–264.
- Warren, James
 - 1999 *The Sulu Zone 1768–1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Quezon City: New Day Publishers.
 - 2024 *Typhoons: Climate, Society, and History in the Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Wilcken, Lane
 - 2010 *Filipino Tattoos: Ancient to Modern*. Atglen: Schiffer Publishing, Ltd.